

寺澤優著 (有志舎、2022年)

## 戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会 売買春・恋愛の近現代史

嶽本 新奈\*

本書は、戦前の日本における私娼と性風俗産業を詳らかにした一冊である。私娼とは、「公娼以外で売春をする者」(8頁)を指し、本書ではその代表例である芸妓と酌婦、そして昭和期から台頭するカフェー女給が考察対象となる。近代日本の売買春研究は主に公娼制度と廃娼運動を中心に進められてきたが、著者はその重要性を認めつつも、私娼はその勢力と影響力において無視すべきでなく、公娼制度を補完する存在であった私娼についての研究が希薄では近代日本の売買春の全体像はつかめないと私娼研究の意義を述べる(10頁)。

本書の構成は3部7章に序章と終章が加わる。第1部と第2部には補論も置かれている。序章では先行研究の整理に伴って問題の所在が指摘され、すでに述べたように本書の企図が述べられる。以下、簡単にその内容をみていきたい。

第1部「大正期の私娼と〈準公娼制度〉への編入」では、1920年代までの私娼のありようを描くために芸妓と酌婦の売買春の実態とそれに対する管理(規制)が明らかにされる(22頁)。第1章では、法的に売春が禁じられていた芸妓が売春を拒否できなかった原因として、花街の分業制度(置屋・待合・料理屋)という構造が分析される。また、関東大震災後には市街地復興に乗じて花街指定地が急激に拡大されたことが混乱をきたしたことも描かれる。

第2章では、芸妓と同じく私娼であった酌婦が検討される。銘酒屋の客は酒だけでなく酌婦との「性交渉を目的」としていた(57頁)。銘酒屋街は管理される公娼制度とは異なり、「近代化する文化社会に柔軟に対応できた」(86頁)がゆえに繁盛するが、そこで働く酌婦は公娼になれなかった女性たちでもあった(86頁)。つまり「銘酒屋街と酌婦という存在は、需要の面でも供給の面でも、公娼制度が抱え込むことができなかった人々の受

け皿として機能していた」(87頁)のである。このように第1部は「娼妓のほかに準公娼としての芸妓、そのさらに外側に酌婦がおかれるという幾重にも重なるような形で準公娼としての私娼が位置し」、同時に、こうした構図は「地域の利益や所轄警察との利害関係を背景に黙認体制へと組み込まれて」いたとまとめられる(87-8頁)。

第2部「身売り問題と花柳界遊びにみる〈準公娼制度〉の限界」では、当時の紹介業と買春した青年から「同制度が構造的に抱えた問題」を描き出す(114頁)。第3章では、大正期から昭和戦前期までの東京府の芸娼妓酌婦紹介業が検討される。従来、公娼制度には「貧窮層の救済措置」(143頁)というコンセプトがあったとされてきた。しかし芸娼妓酌婦紹介業を詳細にみれば、娼妓の数は一定数にとどまりつつも、芸妓、酌婦の数は増加しており、さらにその私娼にすらなれない子女がいたことから、1920～30年代には救済措置は「十分に機能していなかった」とされる(143-44頁)。

第4章では、ジャーナリストであり、かつ社会運動家で廃娼論も唱えていた村嶋歸之の著作をもとに花柳界が抱えていた問題が検討される。廃娼論者たちの研究はこれまでも蓄積があるが、そうした廃娼論者たちと村嶋を分けるものは、キリスト教や廃娼論を受容するまで彼が買春者だったことである。「自身の遊興経験やそこで感じた矛盾、葛藤によって形成され」(152頁)た彼の廃娼論からは、既存の花柳界が「経済的・男性的『弱者』」(176頁)である青年にとって満足できるサービスを提供できる場となっていなかったことが伺える。というのも、公娼は「『恋愛のプロセス』を売ること」はできず(176頁)、「恋愛のプロセス」を提供できる花街は経済的「弱者」である青年にとって障壁が高いものだったからである。こうして第2部は、「公娼-準公娼制度が売り手と買い手

\* お茶の水女子大学

の両側面からの『需要』を満たしきれなくなっていたという制度の限界性(177頁)が描き出される。

第3部『『エロ・グロ・ナンセンス』時代の到来』では、新たな性風俗産業としてカフェーが台頭してきた1930年代を対象とする。第5章では、カフェーのルーツとその変化を追いながら、そこで働く女給の実態を明らかにする。そもそも「女性接客業の急増」と「性の商品化」は表裏一体で進んでいったが(206頁)、関東大震災後に急増したカフェーの競争激化によって「女給の性の商品化は不可避」なものとなっていく(211頁)。この新たな性風俗産業は花柳界の経営悪化を招き(216頁)、「女郎屋ハカイ」と言われるほどであった(220頁)。

第6章では、カフェーの特質が明らかにされていく。前章は「女給の性の商品化」を強調したが、しかし著者はカフェーの本来の特質は「直接的な性交渉や類似行為のみを売買しないという営業のあり方」であるとする(230頁)。客が求めていたものは自身への女給の「興味関心」と「その先の擬似または現実の『恋愛関係』」であり、それこそがカフェーの流行の主要因であったのである(231頁)。また紹介業を必要としない女給の労働形態は、拘束性が付き纏う芸娼妓との違いを際立たせ、女性の就業先の新たな選択肢ともなり、かつ「疑似恋愛」を求める客層の両者にとって効果的であった(254頁)。

第7章では、カフェーから派生した「ダンスホール取締・閉鎖問題を通して戦時下の性風俗統制」(261頁)が検討される。自由な異性関係に関わる

文化の場とみなされたダンスホールはそれゆえに弾圧され、閉鎖の憂き目に遭う(276-77頁)。そもそも「自由恋愛」は、「国家や家父長の意味ではなく当人同士の意思が最重要視されるという意味で、家族制度とも戦時下の国策とも相容れるものではなかった」(280頁)。この取締の内実を探ることで、「密売淫」を黙認し、他方で「自由恋愛」を軸とする性風俗は弾圧するといった対照的な特質が浮き彫りにされる(288頁)。

終章は私娼研究の意義があらためて提起されたうえで、今後の私娼研究の課題と展望が概括される。著者自身がすでにこの章で課題を網羅的に挙げているのだが、評者があえてそこに付け加えるとするれば、日本の植民地支配による影響である。本書の対象とする時代であれば、台湾や朝鮮出身者の私娼もいたのではないかと推測するが、本書に植民地への言及はほとんどなかった。史料的な限界もあると思うが、その視点を含めた今後の研究成果を期待したい。

本書は、これまで「公娼以外で売春をする者」として「私娼」と一括りにされてきたものを芸妓、酌婦、女給といった名辞ごとにその労働形態と、法律および制度を詳細に検討し、性風俗産業の変化や隆盛を大衆意識と社会構造の変化から精緻に読み解くことで、茫漠としていた私娼の解像度をぐっと上げたといえる。本書によって私娼研究は格段に進み、近代日本の売買春史および性風俗産業史はさらなる広がりや深みを持ち得ることになった。今後の私娼研究において本書が参照軸となることは言を俟たない。